

イスラーム地域としての中国とタイ (2)

—タイにおけるムスリムの歴史—

木村正人
松本光太郎

目次

1. はじめに
2. 人口と分布
3. 「港市国家」アユタヤの成立とイスラーム
4. パタニー王国とタイ
5. マレー系ムスリム
6. インドネシア系ムスリム
7. シャム系ムスリム
8. ペルシア系ムスリム
9. 南アジア系ムスリム
10. ミャンマー系ムスリム
11. マレーシア北部のタイ系ムスリム
12. アメリカのタイ系ムスリム
13. 婚姻による改宗
14. おわりに

1. はじめに

「仏教国」として知られるタイにも、人口的には少数ではあるがイスラーム教徒、すなわちムスリムが住んでいる。マレーシアと国境を接するタイ南部ではムスリムが多数を占めていることは比較的知られているものの、それ以外の地域にもかなりのムスリムがいることについては、あまり知られていない。前回の調査報告では、タイ北部の雲南系ムスリムについて紹介したが、

今回の報告ではそれ以外の地域におけるムスリムの歴史について述べることにする。現在のタイにおける国民統合とムスリムに関する問題は、今回の報告で紹介する予定である。

アラビアやペルシアの商人は、すでに9～10世紀にはアフリカ東海岸から、インド、東南アジア、中国に到る広い地域で交易を行っていた。15～16世紀には、タイ(シヤム)は *Shahr-i Naw* (新港) という名前でアラブ人に知られていた(石井1999:61)。東南アジア島嶼部にある諸都市が次々とイスラーム化していった中で、アユタヤにもアラビアやペルシアからの商人や使節が訪れたが、アユタヤでは王室のイスラーム化までには至らなかった。しかしながら進んだ知識や技術を持っていたイスラーム商人はアユタヤ王室に重用され、シヤムに定住するようになり、一部にタイの宮廷へ進出する過程で仏教に改宗した人々もいたが、改宗後もムスリムとの密接な関係を維持していた。

東南アジアにおける交易の拡大は、各地に港湾都市を発達させたが、シヤムはこれらを勢力下に置くためしばしばマレー半島に軍を進め、パタニー王国にもたびたび攻撃を加えた。シヤムとパタニー王国は朝貢関係にあったが、20世紀初頭の英領マラヤとの国境線確定によりその一部はシヤムに併合された。しかしながらパタニー側の抵抗活動は併合後も続き、現在の独立

運動やテロ活動へと続いている。

タイ南部における独立運動やテロ活動に対する報道のあり方は、仏教国であるタイにとってムスリムがあたかも異質な存在であるかのようなイメージを増幅している面があることを否定できない。事実、タイ国内では、かなりの人々の間に「タイ南部は危険である」というイメージが広がっており、「イスラームは過激な宗教である」という誤解を生み出して来た。この調査を進めて来た過程で発生した「9.11 事件」とそれをめぐる世界のメディアの報道は、タイにおけるイスラームに対する理解をいっそう困難にして来たと言わざるを得ない。しかしながら、タイ南部出身のムスリムが国会議長や外務大臣に任命されて来たように、実際にはタイ政府がムスリムとの対話政策を重視して来たことも見逃すことはできない。その背景には、一般に知られている以上に、それはタイに住む人々自身にとっても意外なほど、タイが歴史的にもイスラームと深い関わりを持ち、現在でもムスリムの人々が社会的に大きな役割を果たしていることがあるのだ。こういう時期であるからこそ、タイとムスリムの関係をもう一度確認することが必要ではないだろうか。ネットワークとしての大きな広がりを持つイスラームの広がりを、タイ南部におけるいわば分離・独立運動という枠組みに押し込めようとするのに対して、異議を唱える必要があるだろう。

今回の報告では、ほぼ 1999 年から 2004 年にかけて行なったタイ国各地におけるイスラームとムスリム社会に関する調査の一部をまとめたものである。この報告ではタイのナショナリズムが形成される 1930 年代以前の歴史を中心に出身地別に区分して述べているため、やや断片

的になってしまった感があるが、イスラームは異なる民族や地域といった枠を超えて多様性を包容する仕組みを備えており、それがムスリムという同胞意識に現れている。タイ各地のムスリムたちは、決して孤立した存在ではなく、様々な形でのネットワークで結ばれていることを見落としてはならないだろう。

執筆者の一人である木村正人の問題意識は、タイへ移住してきたムスリムもまたタイのナショナリズム形成の中でタイ人としての意識を獲得して行く過程に集中している。このテーマについては次回の報告の中で論ずることとして、今回はその前段階について紹介していくことにする。調査を開始してから五年以上が経過し、研究成果の公表が遅れたため、調査に協力してくださった方々への御報告が遅れてしまった。この場を借りて、心よりお詫び申し上げたい。各地で協力してくださった方々に対しては、今回は紙幅の関係もあり、中間報告である「中国と東南アジア大陸部のイスラームに関する画像資料のデジタル化」の「4. これまでの調査地一覧」の中でお名前をご紹介した(松本光太郎・木村正人 2004)。その他にも、お名前を掲載しなかったが本当に多くの方々のお世話になっており、この場を借りて感謝の意を表わしたい。また、木村正人の東経大在学時代の友人である鎮目博之、チュリコーンご夫妻、野口靖弘氏に感謝の意を表す。最後になるが、各地の調査に同行し、またデジタルコンテンツの作成、通訳など多くの面で協力を惜しまなかった、木村正人の妻であるラクサミーにも感謝の意を表したい。

なお、文中に登場する人名で括弧がついている場合には、称号(本名)となる。

2. 人口と分布

2000年3月の国勢調査によれば、タイの総人口は約6000万人、同調査中の宗教別人口統計(2000年教育省発表)によれば、仏教徒が約5700万人、約95%、ムスリムは約280万人、約5%である。これに対して、タイ国中央イスラーム委員会(The Central Islamic Committee of Thailand, 以下イスラーム委員会、中国系ムスリムは「伊斯蘭教協会」と呼ぶ)発表のムスリム人口統計(1998年統計)によれば約520万人(Disttakorn 他1998: 73-5)にもなるが、この統計はモスクに登録されている人数である。この統計には、タイ総人口やムスリム以外の人口が記載されていないなどの問題があるが、例えば2001年3月の国勢調査によればタイ南部パタニー県の総人口は約60万人、ムスリムが約48万人であるが、イスラーム委員会発表のムスリム人口は約100万人であり、総人口を大きく上回っている。同様にムスリム人口が過半数を占めるヤラー、ナラティワート、サトゥーン各県でも、ムスリム人口が総人口を上回っている。

モスクでの登録方法について、カーニムラー・パターン氏(カンチャナブリー県イスラーム委員会委員長)によれば、出生、死亡、転出、転入、改宗などの場合にモスクに届ける必要があるが、こうした届出を怠る場合もあるため、未登録や未更新、二重登録の場合があるという。また、同県のミャンマー系ムスリムは、タイに住んでいるにも関わらずタイ国籍を持っていないが、モスクでは登録されているという。モスクでの聞き取りに対しては、この登録者数をム

スリム人口として答えるのが一般的である。イスラーム委員会は、国勢調査の統計よりもモスクにおける登録者を基準にしている。これらの数字はタイにおけるムスリムの存在をアピールする上でも政治的に重要な数字である。同時に、前回の報告で紹介したタイ北部の難民村の住民がそうであるように、タイ政府は難民や移住者に対してタイ国籍を簡単には与えない政策をとっており、このため国勢調査の数字が実態を反映していないという要因もある。

モスクの数については事情が異なり、2000年教育省発表の統計によれば3,181カ所であるが、この数はイスラーム委員会への登録モスクの数を基準にしている。未登録のモスクがかなりあり、実際の数はさらに多いであろう。未登録の理由については、立地条件などのモスク登録に関する規制、他の法律に基づいて基金や協会として登録、コミュニティの分裂や個人的名声を目的として建設された場合などがある。

ここで、タイ語におけるモスクに対する呼称にもふれておこう。タイ語では、モスクを一般にスラオ(*sulao*)と呼ぶが、これはマレー語から入ってきた名称である。マレーシアでは金曜礼拝が行われるモスク(ジャーミア)をマスジド(*masjid*)と呼び、それ以外をスラオとして呼んで区別するが、タイ語では日常的にはこれらを全てスラオと呼ぶ。特別な場合として、本文中に何回か登場するが、アユタヤとバンコクのトンブリ地区にある、アユタヤ時代からラタナコーシン朝初期かけて建設されたモスクはクディー(*kudi*)と呼ばれている。パーリー語起源で僧の住む小屋を指すが、当時はモスクだけでなくキリスト教会に対しても使われていた。1947年のイスラーム・モスク法ではマスジド

の名称が使用され、現在でもイスラーム委員会へのモスク登録用紙にはマスジドの名称が使われている。

ムスリム人口はタイ南部に集中しているが、パタニー県はマレーシアとは国境を接していないにもかかわらず80%以上をムスリムが占めている。対照的に、マレーシアと国境を接しているソクラー県では過半数に満たないが、ムスリム人口そのものは国境を接しているサトゥーン県よりも多い。19世紀以降の中国人の流入と20世紀以降タイ人の流入の影響によるもので、それ以前のムスリムの比重は更に高かったと考えられる。タイ南部以外では、ナコンシータマラート県周辺、マレー半島西岸部、バンコク周辺にそれぞれ数万から数十万人が分布している。タイ南部からの移住者の子孫が多くを占めている。タイ北部のチェンマイ県、チェンラーイ県、メーホンソーン県にも数万人が分布し、前回の報告で紹介した雲南系ムスリムの比重が高い。全国に遍在しているのはパキスタン系ムスリムである。マレーシアの政治学者オマール・ファルーク・バジュネイドは、「ブルネイやパーレーン、オマーン、クウェート、ヨルダンさえよりもタイのモスクの数は多く、バンコクのモスクの数はブルネイやシンガポールよりも多い。タイにおけるムスリムは王国のどこでも見かけられる存在である」と述べている(Omar 1999: 223)。

3. 「港市国家」アユタヤの成立とイスラーム

東南アジアは、アラビア半島からインドを経て中国にいたる海上交易路上に位置しており、

イスラーム成立後、アラビア、ペルシア、インドのムスリム商人らが来航していたが、本格的なイスラーム化は15世紀から18世紀にかけてのことである。歴史経済学者のアンソニー・リードは、15世紀から17世紀(ないし18世紀)における東南アジアを「交易の時代」と呼んだ(Reid 1988, 1993)。最初にイスラーム化したのは、スマトラ北部のパサイ王国、マレー半島西岸のムラカ(マラッカ)王国、その後スマトラ全域、ジャワ北岸から中部、モルッカ諸島、カリマンタン、フィリピン、スラウェシ、インドネシア東部にかけてイスラーム化が進んでいった。16~17世紀には、スマトラ北部のアチェ王国、中ジャワのマタラム王国、西ジャワのバンテン王国、スラウェシ南部のマカッサル・ゴア王国、フィリピンのスルー王国などが興隆した(Reid 1999: 28, 大塚和夫他2002: 670-671)。こうした地域は、のちに一定の文化的共通性があると自覚されるようになり、「マレー世界」と呼ばれることがある。

東南アジアにおけるイスラーム化は、一般的に平和的かつ漸次的に進行し、なかでも国王の改宗が一般民衆の改宗を導くというパターンがある。当時の海上交易において主要な役割を果たしていたのがムスリム商人であったため、国王や官吏がムスリムであることは、こうしたムスリム商人を引きつける上で有利だったためであると言われる(大塚和夫他2002: 462)。東南アジアのイスラームの多くはスンナ派のシャーフイー学派に属しているが、もともとインドからの影響も受けた多神教的世界観を持っていた人々への浸透過程で、スーフイズムが一定の役割を果たしたともいわれる(Reid 1999: 37)。

現在、東南アジア島嶼部ではムスリムの人口比率が非常に高く、これに対して東南アジア大陸部ではせいぜい5%程度にとどまっているが、その中ではミャンマーのアラカン地方とタイ南部においてムスリムが多数派となっている。その意味で、タイは東南アジア島嶼部と東南アジア大陸部のちょうど境界に位置していることになる。

アユタヤ (1351-1767) は中継貿易港の一つとして15世紀にはすでにペルシア人に *Shahr-i Naw* (新港) として知られていた。シンガポールのカティリタンビ・ウェルスは交易港と政治権力の場が結合した国家を「港市国家」という概念でとらえることを提言し、石井米雄はこの概念を用いてアユタヤもまた港市国家であると考え、「中国とインド・西方諸国の双方に触手を持つ中継貿易基地」であると見なした (石井1992: 75-91)。同時に、タイの歴史学者ニティの提起したアユタヤ朝の「家産官僚」における「行政職」と「専門職」の分類に注目し、専門職の多くが外国人によって占められたことにより、「タイ国王には外来の先進文明の所産を排他的に享受する道が開かれた」と指摘している (石井1992: 88, 2001: 193)。こうした外国人には爵位などが与えられたが、それは「タイ人化」のチャンネルであったと言われる (石井1992: 87)。

アユタヤの官僚機構の中にはプラ克蘭 (*praklang*) と呼ばれる、外交や貿易、国王の倉庫の管理、外国人管理などを司る、現在の外務省や商務省、国防省に相当する部署があり、日本語では「王庫」と訳されている。ペルシア商人のシェイク・アフマド (*Sheikh Ahmad*, 1543-1631) は、アユタヤで富を築き、プラ克蘭内

の右港務局 (*krom thaa kwaa*) の長となり、王室顧問にもなった。右港務局は、東南アジアからベンガル湾にかけての通商と外務などを管轄した。シェイク・アフマドの時代に、中国方面を除き、外国貿易は右港務局の下に再編された。シェイク・アフマドはのちのバンコク王朝 (ラタナコーシン朝, 1782-現在) において王に最も近い関係にあった高級官僚であるブンナーク家の祖先であり、シャム政府に進出した外国人の最も顕著な例である (石井1992: 87)。ブンナーク家は、有名なラーマ五世 (チュラロンコン大王) の近代化政策に立ちはだかった、最も有力な貴族として知られる。ブンナーク家は仏教に改宗したが、後述する Okphara Sinnarat のように、改宗後も有力な親ムスリム勢力であった (Reid 1999: 34, 36)。右港務局長はムスリムの長としての役職でもあり、チュラーラーチャモントリー (*Chularajmontri*) と呼ばれ、現在でも全国イスラーム委員会委員長に対してこの名称が使われているが、今回の報告で述べることにする。

アユタヤはイスラーム交易ネットワーク拡大の中で発展した「港市国家」であったが、水路を利用してアユタヤに至るルートの他に、現在のミャンマー領でアンダマン海に面したテナセリム (メルギー)、タヴォイのような外港からのルートもまた重要な位置を占めていた。マレー半島を横断し、再び水路でアユタヤへ向かったが、この交易ルート沿いの小国にペルシア人やインド人のムスリムを国主に任命した。テナセリムを1460年代から、タヴォイを1488年から支配下に置いたことが、アユタヤがイスラーム交易ネットワークにおける受益者たり得た一因であるという指摘もある (Andaya 1999:

130)。1549年にはミャンマーがアユタヤの王子を連行し、身代金としてテナセリムからの利益を要求したが、アユタヤの外港の中で最も利益が多かったからである。アユタヤは1592年に支配権を取り戻し、1760年まで支配した(Chutintaranond 1999: 115-6)。テナセリムやタヴォイに対する支配権を回復した頃から、アユタヤは外国人保護政策に転じたが、そうした外国人の中で特に重要な役割を果たしていたのがペルシア商人だった。

東南アジア島嶼部の多くがイスラームを受容して行ったのに対し、アユタヤが「仏教国家」として繁栄していたことは、一見タイがイスラーム化しなかったことと同義のように見える。しかし、石井自身が「アユタヤ史を見るかぎり、国家権力の関心は農業ではなくもっぱら貿易による国富の増大、より厳密に言えば王室の富の増大にあったように思われる」と指摘しているように(石井1977: 148)、イスラーム交易ネットワークに組み込まれたことが、まさにアユタヤ発展の直接の原因であった。石井はその交易がどこにつながっているかを実際には知っているにもかかわらず、そのことをあまり明確には述べず、そのことを避けようとしているかのようにさえ見える。タイ王室の関心は、いかに自分たちがイスラーム化せずに、交易からの利益を支配し続けるかであったのであり、どうしてもパタニー王国を支配下においておこうとしたのは、こうした動機にもとづくものであり、イスラーム化に対するバッファー(緩衝地帯)を設定しようとしたからではないだろうか。こうしたタイ王室の行動こそが「港市国家」としてのタイのいわば暴力的な一面なのである。石井の「港市国家としてのアユタヤ」という議論は、

アユタヤとイスラームとの関係をぼかしたことによって、アユタヤを主人公にしたように思われる。

4. パタニー王国とタイ

マレー半島中部の東海岸に位置するパタニー王国もまた、ムラカ王国からやや遅れて16世紀初めにイスラーム化したと言われる。王国自体は14世紀頃から存在し、やがてマレー系スルタンの支配する王国となった(大塚和夫他1976: 2002)。『パタニー年代記』によれば、王に改宗を進めたのは、スマトラ北部のパサイから移住し、王の病気を治療した一人のムスリム(*Sheikh Safiuddin*)であるという(Teeuw, A and Wyatt, D.K. 1970)。ムラカ王国からのマレー系ムスリムの移住もイスラーム化を進めた。パタニー王国にも多くの外国人がいて、その中にはイスラームに改宗する者もいたが(Hatta 1998: 61)、パタニー王妃と結婚した中国人のリム(林)トキアウもその一人で、パタニーで最古のモスクの一つであるクルセモスクを建設したと言われる。パタニー王国は、同国の住民だけでなく、マレー半島北部、スラウェシ、カリマンタン、カンボジアやチャンパなどへの布教のセンターとなり、ポーノ(ポンドック)での教育も開始された(Hatta 1998: 61-62)。16~17世紀にかけて、安南と対立していたチャンパに対してパタニー及びパタニー支配下のクランタンから援軍を送り、司令官であったダト・ムスタファーがチャンパ王(*Sultan Abdul Hamid Syah*)となったと言われる。

アユタヤとの関係では、朝貢関係にありつつも、アユタヤの弱体化や混乱に乗じて、しばし

タイ国分県地図



ば独立を主張したが、結局はアユタヤの派遣した軍隊により鎮圧された。1785年にはバンコク王朝(ラタナコーシン朝)の支配下に入り、7つの朝貢国に分割された。1909年のイギリスとの不平等条約(1855年に締結されたボウリング条約)改正の交換条件としてマレー側4州が英領マラヤに編入され、タイ側のパタニーは州レベルの行政単位に編成され、1933年にはパタニー県を含む3県に分割された(大塚和夫他 760: 2002)。

パタニー以外では、17世紀の初め(仏歴2145、西暦1602/3頃)、ポルトガルの侵入により中央ジャワから逃げて来た同地の国主、モゴールが、マレー半島中部のソクラーに勢力を構えた。ペルシア出身であるがスンナ派に属していたとされる。モゴールの代にはアユタヤに服属し、息子のスルタン・スレイマン・シャーの代に一時独立したが、やがて鎮圧され、子孫は海軍提督としてアユタヤ王室に仕え、パツタルンやチャイヤーの地方国主に任命された(Walliphodom 1996: 98-107, Chalayondecha 1996: 27-34)。パタニー領であった3県と、ソクラーを含む2県を合わせた地域が、タイ南部でムスリム人口比率の高い地域となっている。

1634年にアユタヤがパタニーを攻撃した当時の海軍力はそれほどではなく、パタニー側もアユタヤ艦隊をあなどっていたと言われるが、その後は「ムスリム、中国人、ヨーロッパ人」の乗組員が加わり、これがアユタヤ艦隊を強力なものにした(Reid 1993: 125-6)。仏歴2347(西暦1804/05)年に編纂された「三印法典」には、チャム人傭兵のことが書かれているが、航海術を買われてのことではないかと言われる(石井2001: 182)。アユタヤとムスリムの軍事

力との結びつきは、オランダの脅威が高まっていた17世紀のナラーイ王の時代に頂点に達し、島嶼部のイスラーム王国からも改宗を勧める使節が派遣された。しかし、後に親仏政策に傾くと、ムスリムの影響力は急速に後退する。大陸部と島嶼部によって経過は異なるが、ムスリムの軍事力は、東南アジアにおけるイスラーム拡大の要因の一つであった(Reid1999: 37)。アユタヤは、島嶼部のようにイスラーム化することはなかったが、強力な交易ネットワークと軍事力を備えたムスリムを重用することで、莫大な利益を獲得し、権力基盤を強化したのである¹⁾。

以下、出身地別に見たタイにおけるムスリムコミュニティの歴史について、述べていくことにする。歴史的に、タイ人が大規模にイスラームへと改宗した事例は報告されていないが、同時に、おそらくはマレー系ムスリムの子孫であるにも関わらず、単に自分たちのことを「タイ人」とであると認識し、自らの出自に関して明確な認識を持たない場合がある。この問題については、今後の調査の中で明らかにして行きたい。また、雲南系ムスリムについては、前回の報告を参照して頂きたい。

5. マレー系ムスリム

(1) タイ南部からの強制移住

マレーシアでは、マレー語のアラビア文字表記をジャウィー文字と呼び、イギリス植民地時代に考案され、1957年の独立後に公用化されたアルファベット表記をルミー文字と呼ぶ。タイ南部のマレー系ムスリムの多くはマレー語を話し、ジャウィー文字を使用している。タイ南部

のパタニー、ヤラー、ナラティワート県とソクラー県の一部ではマレー語のクランタン方言が使用され、イスラーム教育もソクラー以外ではマレー語で行われている。サトゥーン県ではムスリムが多数を占めているが、現在ではタイ語を母語とする人々が多く、一部のマレー語を母語とする人々はマレー語のケダー方言を使用し、マレー語でイスラーム教育を行っている。以上の地域を除くと、マレー系ムスリムはタイ語を話しており、タイ語でイスラーム教育を行っている。

タイによる南タイからのマレー系ムスリムの強制移住は、タイがカンボジアとの戦争により兵力を必要とした13世紀にまでさかのぼる。ナーラーイ王の時代には、アユタヤにマレー系ムスリムが移住させられたという記録がある²⁾。その後も、17世紀までこうした強制移住は続けられたが、その間の詳しい記録は残されていない。パタニー側の記録によれば、17世紀にはタイによる攻撃の結果、一家族当たり一人の子供が人質としてタイに連れ去られたという。記録がはっきりして来るのは、18世紀後半からのことである³⁾。1767年にビルマの侵攻によりアユタヤが滅亡すると、ビルマはマレー半島へも侵入し、これによりマレー系ムスリムの分布が変化するが、詳細は後述する。1782年のバンコク王朝(ラタナコーシン王朝)成立によりシャムが勢力を回復すると、ラーマ一世はパタニーをたびたび侵略し、約4000人のマレー系ムスリムをバンコクに連行したと言われるが、その中にはパタニーの王族や高級官僚も含まれていた(Binch, A 2000: 46-47)。ラーマ三世もまたこの政策を引き継ぎ、マレー半島の諸国から多数の人質をバンコクに連れ帰った。1828年にバン

コクにいたマレー系ムスリムについては約3,000人という推計がされているが(Scupin1998: 239)、1832年に安南と連合しようとしたパタニーの反乱を鎮圧した時には、その三倍にも増加したと言われ、控えめに見ても4,000~5,000人はいたのではないかと考えられている(Scupin1998: 239)。連行された人々には、パタニーとともに抵抗したケダー出身者も含まれていた。こうした強制移住が行われた背景には、当時の戦争の方式は大量殺戮が目的ではなく、兵力や労働力の確保が重視されていたこと、タイ南部の反抗を抑えるための人質が必要だったことなどがある。

タイ南部から連れて来られたマレー系ムスリムの人々の移住先はバンコク周辺と、現在のナムコンシータマラート県ムアン郡、ペブリー県バーンレーム郡であった。このうちバンコク周辺に移住した人々は主に現在のバンコクの東はずれに土地を与えられた。彼らとその子孫は強制労働に従事させられたが、なかでもバンコク中心部から東北に延びるセン・セーブ運河の建設に従事した。当時の国策であった耕地拡大のための運河建設にも従事し、セン・セーブ運河を中心に集落が広がっていった。ここが現在のノンジョーク区、ミンプリー区を中心に広がる地域で、セン・セーブ運河沿いには多くのモスクが建設されている。バンコクにあるモスクの70%以上がマレー系ムスリムのモスクである。この地域以外では、チャオプラヤー川の河口からアユタヤまでの沿岸に移住させられた。これらバンコク周辺へ移住させられた人々のうち王族はバンコク中心部に、職人などの都市住民は王宮の外側に、農民は中心から外れた地域に土地を与えられた。

イスラーム地域としての中国とタイ (2)

マレー半島東岸部ならびにバンコクを中心とした中央タイから中央タイ東部にかけての強制移住させられた地域と、マレー半島西岸部ならびにソンクラ県、ナコンシータマラート県にかけてのそうでない地域では歴史が異なる。断片的ではあるが、以下に紹介しておく。なお、タイ中央部のムスリムの間では、自分たちの歴史についての研究が盛んになっており、今後新たな「歴史」が書き加えられて行く可能性がある。

(2) バンコク周辺

バンコク市の王宮近くに位置するマハーナーク集落には、強制移住させられたマレー系ムスリムの歴史が残っている。『マハーナークモスクの歴史』によれば、仏歴 2322 年 (1779/80) もしくは 2334 年 (1791/92) 頃、ラージャ (プレー) パタニーという指導者に率いられたムスリムの一団が連れてこられ、ラーマー一世から土地と建物を与えられた。この一団には職人が多く、現在まで王宮の職人として仕え、「プレー」(これが本当に与えられたのかは疑わしい)、「ルアン」, 「クン」などの称号を与えられたという。1802 年から 1804 年頃、より交通の便利なマハーナーク運河の交差点付近に移動した。その後アユタヤなどからもムスリムが移住し、人口が増えた。最初のモスクが建設されたのは、2350 年 (1807/08) 以前だということしかわからない。現在のモスクは 1968 年に改築されたものである。

バンコク周辺へと強制移住させられたマレー系ムスリムは、やがてタイ各地に移住して行った。中央タイのプレーチンブリー県、チョンブリー県、ラヨン県、チャンタブリー県、ト

ラート県と、南タイ北部のプラチュワップキーリカン県とチュンポン県、南タイ西部のプーケット県である。バンコクの人口増加と 1960 年代以降の政府による開拓村建設などがこれらの地域への移住を促した。このため、南タイ方言の使用されているチュンポン県やプラチュワップキーリカン県に住むマレー系ムスリムは、中央タイ方言を使用している。チャンタブリー県ムアン郡のマレー系ムスリム集落はタイカンボジア国境周辺での宝石採掘のために移住した。プーケット県ムアン郡のマレー系ムスリム集落の場合は、観光地での商店経営のためである。

(3) ペブリーとナコンシータマラート

タイ中央部のペブリー県バーンレーム郡ターレーン村にもマレー系ムスリムが移住させられた。当時は港で、マレーシアのトレンガヌ、インドネシアのジャワやスマトラ、インドなどからの船が立ち寄った場所で、香辛料や香水を運んで来て塩と交換した。その後は同県チャム郡やターヤーン郡、プラチュワップキーリカン県のチェディーサームヨード郡へも移住していった。

タイ南部のナコンシータマラート県ムアン郡ターサーラー村周辺はサイブリー、すなわち現在のマレーシア、ケダ州から連行された最初の場所である。その後は、同県スィチョン郡、ロンピブーン郡、チャウアット郡へと移住して行った。スラータニー県カンチャナディット郡の場合もサイブリーから連行された。

(4) マレー半島西岸部

マレー半島西岸部もまたマレー系ムスリムの

多い地域である。1992年版タイ国モスク登記簿によれば、すでに述べたサトゥーン県を除いて、モスクの集中している地域は、トラン県ガンタン郡、パリアン郡、ヤーンターカーウ郡、スィカオ郡、クラビー県ムアン郡、クローントーム郡、ランター島、アーウルック郡、パンガー県ムアン郡、クラブリー郡、タクアパー郡、タクアトーン郡、タップブット郡、ターイムアン郡、ヤウ島、プーケット県ムアン郡、カトゥー郡、タラーン郡、ラノーン県ムアン郡、カポー郡、スックサムラーン郡で、多くが海岸か島に集落が形成されている。これらの地名はマレー語に由来しており、マレー語由来の地名はミャンマーのメルギー諸島にまで広がっている。マレー半島西岸部は、アユタヤ時代以前はタイの勢力があまり及ばなかった地域で、マレーシアのマラッカやケダー、ミャンマーのテナセリム（メルギー）との関係が強かった地域である。

古いプーケットの民間伝承によれば、無人のプーケットに住み着いたのはマレーシア、インドネシア方面から来たムスリムの3兄弟で、それぞれが領主 (*to*) となり、プーケットの最初の住人ではないかと言われる (Suchaya 他 ed 2000: 41)。仏歴 2204 から 2214 年 (1661/62 - 1671/72) に、プーケット県タラーン郡では都市住民とマレー人ムスリム (*khaek malayu*) が協力して、スズの利益を独占していたオランダを追放したという記録がある。これ以降、オランダの商社が来ることはなくなり、タラーンにおけるスズの生産と取引規模が増えるにつれ、マレー人がタラーン以外の地域にも住むようになった (Phongsphaibun ed 1986: 1395)。

『タラーン (プーケット) 年代記』によると、ケダースルタンの血を引くプーケットの領主が、

アユタヤ時代からいたという。アユタヤ崩壊後のビルマの侵入からプーケットを守り、「タイ救国の3大女傑」と言われている、テープカサットリーとシーセントーン姉妹はケダースルタンの血を引いている (Suchaya 他 ed 2000: 152)。シーセントーン姉妹の母はプーケットへ従者と共に移住した。この他のマレー王族に関する伝承には、「白い血の女 (*nang luat kaw*)」で知られる、マレー半島のマスリーという女性の物語がある。マレーシア最北部にあるランカウイ島の王族に関する話であるが、マスリーの子供は約 200 年前にプーケットへ逃げたとされ、現在も子孫はプーケットに住んでいる。

1767年のアユタヤ崩壊から18世紀にかけて、シャムの影響下から解放されたマレー半島で勢力争いが起こり、この地域でかなりの人口移動があった。パタニーやソクラーの住民は、この時にケダー州やペナン州へ移住した (黒田 1989)。ビルマのマレー半島侵入により、現在のトラン県やサトゥーン県など沿岸の住民は海沿いに逃げ、一部は無人島であったパンガー県のヤウ島へ避難し住み着いた (Phongsphaibun ed 1986: 247)。以上のことから、マレー半島東岸部の住民が西岸部のケダー州などに移住した以外にも、船で北方へも逃げたのではないかと推測される。なお、プーケット県タラーン郡バンタウ集落では、最初のリーダーは150年以上前に船で商売に来たインドネシア人ムスリムで、仲間を連れてプーケットに住み着いたと言われる (Suchaya 他 ed 2000: 153)。

クラビー県ランター島郡は住民の90パーセントがムスリムである。ランターの語源はジャワ語の「魚を焼くための店」で、ここでは魚がたくさん捕れるのでジャワ人が来て漁を行ない、

時化を避けるのにちょうどよい場所であった (Phongsphaibun ed 1986: 250)。聞き取りでは、この他に祖先がスマトラ島から移住した例もあり、理由も漁業で生計を立てるためであった。

サトゥーン県以北に分布するマレー系ムスリムは、以上のような理由でマレーシアやジャワ島方面から断続的に移住し、イスラームへの改宗者も増えて行ったのではないかと筆者 (木村) は推測する。

強制移住によらない例としては、タイ中央部の東側にあるトラート県レームンゴープ郡とラヨン県ムアン郡にパタニー周辺から移住した例がある。トラート県レームンゴープ郡ナムチアウ村に住むマレー系ムスリムはマレーシアのトレンガヌから来た人たちで、チャム人が移住してきた頃に (「7. チャム系ムスリム」参照)、3本マストの船をあやつり、この周辺でナベを売っていた人たちであるという。この人々はチャム人集落と川をはさんだ対岸に住んだが、現在でも同じモスクで礼拝を行っている。

6. インドネシア系ムスリム

インドネシア系ムスリムの移住は、おおむね交易に伴うもので、規模もそれほど大きくはなかった。17世紀にフランス人が残した記録によれば、当時のアユタヤにインドネシア系ムスリムの商人が拠点を築いていた (Scupin 1998: 242-243)。ド・ラ・ベールの著書に掲載されている1688年の地図にもマッカサル人居住区が示されている。「アユタヤ王朝年代記」によれば、ナーラーイ王 (1656-88) の王位継承にジャワ人が関与し (Cushman 2000: 230)、1685-86

年に親仏政策に転じたアユタヤに対してマッカサル人が反抗した (Reid 1999: 37)。19世紀にも少数の商人がバンコクに移住して、布や砂糖などを売買したが、いずれも個人的な交易のために店舗を出したに過ぎない (Scupin 1998: 242-243)。カニカー・チュタマート・スマリーは、19世紀後半にバンコクへ移住したジャワ人について、オランダ植民地下の強制栽培制度による食料不足と、オランダ人と中国人の交易独占によるジャワ島における人口過剰がもたらしたジャワ島外への移住政策が原因だと指摘しているが、仏歴2408年 (1867/68) にタイに住んでいたジャワ人は162人である (Sumali 1998: 36)。

この他には、1870年代以降のジャワ訪問の際に、ラーマ五世 (1868-1910) がジャワの農業や園芸技術に関心を持ち、王宮の庭園にジャワ人の技術者を招いて、管理と技術指導に当たらせた例が知られている (Scupin 1998: 242-243)。こうしたジャワ人のなかには、王妃の侍女と結婚し、チェンマイでホー人 (雲南系ムスリム) のイマームの仲立ちにより婚礼を行った者もある。

ラーマ五世 (1868-1910) とラーマ六世 (1910-25) の時代には、タイにおける賃金がジャワの約3倍で、この話を聞きつけてタイに来るジャワ人が増加した。ラーマ7世 (1925-35) の時代には、一時入国管理が厳しくなったが、仏歴2470年 (1927/28) に緩和されてからは、ジャワからの入国者が増えた (Sumali 1998: 37)。

第二次世界大戦中には、日本軍が泰緬鉄道の建設に連合軍の捕虜を使用したのが、この中にインドネシア人も含まれていた。1945年の武装解除により解放されたが、インドネシアの再占領

をねらうオランダ王国東インド軍の管理下に置かれた。最初は従っていたインドネシア人も、スカルノの独立宣言のニュースを聞いて逃亡するようになり、オランダに対する抵抗運動に参加した者、バンコクに定住した者、南タイへ移住してゴム園労働者や漁師となった者に分かれたが、マレー系の人々との同化が進み、実態はよくわかっていない (Sumali 1998: 53)。

徐々に人口が増加したインドネシア系ムスリムは、その多数をジャワ出身者が占めていたが、バンコク市内のマカッサンと呼ばれる地域に集まって住むようになり、モスクも建設された。現在バンコク市全体でジャワ系のモスクが5ヶ所あり、マレー系ムスリムの人々と通婚関係にある⁴⁾。この他、カンチャナブリー県にも祖国へ戻らなかったインドネシア人がいる。

7. チャム系ムスリム

現在のベトナム南部にあたるチャンパでは、11世紀の初めにムスリムのコミュニティが形成され、徐々に周辺地域へと影響を広げて行った。ジャワのイスラームはチャンパから伝えられたものである。17世紀以降のチャンパ王はムスリムであったことが知られている。現在のカンボジアに住むチャム人のほとんどがムスリムであり、チャム人とは「チャンパの末裔」だけでなく、ムスリムと同義の言葉として使われることもある (大塚和夫他 2002: 634)。ベトナムの侵攻により、15～18世紀にかけてチャム人の一部がカンボジアに脱出したが、タイのチャム系ムスリムはカンボジアからさらに移住した人々である。

『アユタヤ王朝年代記』によれば、アユタヤに

は「チャム人が掘った水路にある陣営」(パタークーチャム)と呼ばれる集落があり (Kongchana 1999: 71-72)、ナーラーイ王の時代には備兵あるいは助手として初期のアユタヤ海軍の一翼を担っていたらしい (Scupin 1998: 240)。「三印法典」の中にある「武官位階田表」には「アーサー・チャム (チャム人傭兵隊)」という職名が見られる (石井 2001: 182)。これらのチャム人は14世紀にシャムがカンボジアに侵攻した際に捕虜として連れて来られたか、17世紀にカンボジアの政情不安から逃れてきたのではないと言われる (Kongchana 1999: 71-72)。

1767年のミャンマーによるアユタヤ攻撃の際、チャム人もアユタヤ軍の一部として戦った。アユタヤ陥落後はチャム人の多くもバンコクのトンブリに移住したが、一部はアユタヤに戻った。以前住んでいた場所に祖先の霊がいるためだという (Kongchana 1999: 71-72)。その後も、後のラーマー一世が18世紀末にカンボジアを攻撃した際の捕虜として、あるいはやはりカンボジアの政情不安による難民として、カンボジアのチャム人のバンコクへの移住が続いたが、彼らは「ヤーン」と呼ばれた。カンボジア攻撃の際に、アユタヤで生き延びたチャム人の一部が従軍したように、チャム人がタイの王家に忠誠を示したことから、彼らはバンコク郊外に土地を与えられ、そこはクメール語で「プムプロェーイ (森の村)」あるいは「プロェーイスロック (森の町)」と呼ばれ、タイ人は「バーンケーククルア (ケーク家族の村、英語では kitchen village) あるいは「アスマックチャム」と呼んだ。現在で「バーンクルア」と呼ばれる (Thuamprathom 1996: 190, Scupin 1998:

240)。19世紀にシャムがベトナムとカンボジアを攻撃した際に連行されたチャム人もバーンクルアに住まわされた (Thuamprathom 1996: 191)。バーンクルアのチャム人は主に農業に従事したが、漁民や船大工の伝統を守る者もいた。彼らの造船技術や海軍に加わったことから、バーンクルアの運河における商業的および軍事的な輸送の担い手となった。また、チャム系ムスリムの伝統的な絹織物は、彼らの伝統儀式的場でも用いられていたが、後にタイの有名ブランドであるジムトンプソン社の目にとまり、バーンクルアの中心に輸出向け絹製品のセンターが設けられた。「タイ的」であると思われるものが、ムスリムの伝統文化とつながりを持つ例の一つである。バーンクルアのモスクには、ラーマ五世から与えられたランプが飾られており、同時にアザーンの際にドラムを敲くという独特の習慣が残っている (Scupin 1998: 240-241)。

筆者 (木村) の調査によれば、現在タイにあるチャム系ムスリムの集落は、アユタヤ県ムアン郡、バンコク市ラーチャターウィー区 (バーンクルアを含む) の他、トラート県レームンゴープ郡にもある。トラート県レームンゴープ郡ナムチアウ村のムスリムは、カンボジアのコンボンチャム近くにあるコンボンソーム (ともにカンボジア領内にあり、上述のベトナム人の侵攻から逃げてきたチャム人が住み着いた集落として知られる) 出身で、フランスがカンボジアへ侵入した時期に、船に乗って逃げて来た漁民であるという。

8. ペルシア系ムスリム

(1) アユタヤのペルシア人

17世紀アユタヤの外国人町であって、最も影響力の大きかったのはペルシア商人であると言われる。アユタヤの記録に初めて登場するペルシア商人は、ナレースワン王 (1590-1605) の時代、1602年にイラン中北部のシーア派の中心都市であるコムから来たと言われるシェイク・アフマド (*Sheikh Ahmad*, 1543-1631) とその弟のムハンマド・サイードの一族である。すでに述べたように、シェイク・アフマドがプラクランの右港務局長となったことは、彼らとアユタヤ王室の関係を緊密なものにした。1611年には、城壁の外にあったターカーイー集落に住居と商館を建設し、その後ソントム王 (1611-28) からこの集落と城壁内のターイクー集落の土地を与えられ、クディー・トーン (別名クディー・チャオセン) と呼ばれるモスクを建設した。集落は城壁内外にまたがった大きなものに発展した (Tangtrongchit 1990: 4-6)。この集落は、1967年にスイリ・タントロンチットらの調査によりシェイク・アフマドの墓が特定された場所である。1685-88年にペルシア使節の書記官としてアユタヤを訪れたムハンマド・イブラヒムによれば、ナーラーイ王 (1656-88) の時代には、約100人のペルシア人が称号と住居、土地を与えられ、王室の官職に従事し、さらにペルシア兵200人を雇っていた (Kulsirisawat 1974: 48-52)。ナレースワン王 (1590-1605) の時代に活躍したペルシア人にフセインという人物がいて、平時には商人としてアユタヤの貴族に商売の方法を教えていたが、戦時には軍人と

なったことが、『ヌルンヤマーンモスク落成記念文書』に書かれている。フセインの息子はエジプトで学び、帰国してから同モスクを建てた。ペルシア人には上流階級出身者がかなり含まれ、建築、熟練工、学者、詩人などがいて、アユタヤにおけるペルシア人コミュニティの地位を高いものにしてきた (Scupin 1998: 243)。シェイク・アフマドの他にも、17世紀に *Barcalon* (上述のプラ克蘭) の重職にあった Okphara Sinnarat というペルシア人がいたことが知られており (ムハンマド・サイードの息子であるアーカー・ムハマドの称号, *Phraya Srinawarat* に改称した)、仏教に改宗後も親ムスリム派として権勢を振るった (Reid 1998: 34, 37)。

ペルシア人の集落には、ナーイと呼ばれる指導者がいて、イスラーム法学 (シャリーア) にもとづく自治を行い、シーア派のムスリムが多かったことから、シーア派に特有のアシュラーの祭りを行って来た。アユタヤの王は、こうしたムスリムの祭礼に対する援助も行い、ペルシア人に対して寛大かつ協力的な態度をとっていた (Scupin 1998: 243-244)。ナーラーイ王は、ムハンマド・サイードの息子であるアーカー・ムハマドのために、仏教寺院を取り壊してまでモスク建設を援助したと言われる。プラ克蘭の重職に就いていたアーカー・ムハマドは、ナーラーイ王から絶大な信頼を受けていた。このモスクはクディー・ヤイ (別名クディー・チャオセン) と呼ばれるが、別名のクディー・チャオセンとはシーア派モスクに対する総称であり、「セン」とは、アリーとファーティマの息子であるフサインにちなんだものであるという (Kongchana 1995b: 123, Scupin 1998: 243-244)。アユタヤでは、インド系のスーフィーの

シーア派ムスリムによってもモスクが建設された (現在ではスンナ派)。三つあるペルシア系のモスクが建設されたのはナーラーイ王の時代までで、その後はスンナ派のモスクが一つ建設されたが、その背景にはペートルチャー王 (1688-1703) 以降、アユタヤの貿易港としての地位の低下などもあって、親ナーラーイ派の排除など、ペルシア人の地位がやや低下したことが関係している。

(2) トンブリのペルシア人

1767年にビルマの攻撃によりアユタヤが陥落し、ペルシア人もまたトンブリ朝が都を建設したトンブリに移住した。バンコクノイ運河とバンコクヤイ運河の近くで、チャオプラヤー川をはさんで現在の王宮の対岸にあたる場所である。移住した当初、シーア派のモスクがなかったため、アユタヤ時代からあるスンナ派のトンソンモスクで礼拝を行なった。その後、ラタナコーシン朝のラーマー一世からチャオプラヤー川岸のモーン運河河口近くに土地を与えられ、アユタヤ時代の最後のチュラーラーチャモントリーであるプラヤー・チュラーラーチャモントリー (チェーン) の息子で、ラタナコーシン朝の最初のチュラーラーチャモントリーであるプラヤー・チュラーラーチャモントリー (ゴンゲーウ) によりクディールアン・モスクが建設された。俗称はクディーボン、つまり「上のモスク」と呼ばれた⁵⁾。

これに対して「下のモスク」と呼ばれたのが、クディー・チャルーンパート・モスクで、プラヤー・チュラーラーチャモントリー (ゴンゲーウ) の弟にあたるアーカイが、「上のモスク」へ移動しなかった住民と協力して建設したと言

われる。しかしながら、「下のモスク」は、アユタヤ最後のプラヤー・チュラーラーチャモントリー（チェーン）によりトンブリ時代に建設されたという記録もある（Khumraksa, S 1999: 153）。ラーマ六世（1910-25）の時代に、モスク近くに建設されたチャルーンパート橋にちなんで名付けられた。この「下のモスク」のすぐ近くにあるスラオ・パドゥンタムは「上のモスク」から分かれたモスクである（Khumraksa, S 1999: 154）⁶⁾。こうしたトンブリのシーア派モスクもまたクディー・チャオセンと呼ばれる（Scupin 1998: 244）。トンブリに住んでいたムスリムの多くは、現在では都心部の人口増加によりバンコク近郊に分散したが、金曜礼拝や祭日にはトンブリのモスクに集まってくる。

トンブリに移住したペルシア人たちは、王室や貴族と姻戚関係を結び、地位を維持したが、このことを通じて仏教に改宗する場合もあった。シェイク・アフマドの曾孫チャオプラヤー・ペットピチャイ（チャイ）は仏教徒へ改宗したが、その息子がアユタヤ最後のプラヤー・チュラーラーチャモントリー（チェーン）はムスリムのままであった。もう一人の息子のチャオプラヤー・マハーセーナ（セーン）は仏教徒に改宗したが、その息子が有名なブンナーク家の始祖である。ブンナーク家の権勢は王家をも凌ぐほどとさえ言われ、ラーマ五世（チュラロンコン大王）の摂政を務め、王の改革政策の前に立ちほだかったチャオプラヤー・シースリヤウォン（チュアン・ブンナーク）はブンナーク家第一の実力者であった。同様な例にプラモート（*Pramoj*）家がある（Scupin 1998: 244）。タイ宮廷において要職を占めていく上で、仏教徒への改宗が必要であったが、一族の一部を宮廷に

送り込むというペルシア人の戦略だったかもしれない。この他、トンブリ朝後期の1773年には「タイ人とモン人のマホメット教への改宗と信仰の禁止」が布告された（Malulim, J 1995: 67, Chuchuai 1989: 34）。タークシン王が精神異常を来たしていた頃で、かなりのムスリムが役人から商人に転向した（Chuchuai 1989: 34）。これらのムスリム商人は、次のラタナコーシン朝ではブンナーク家などの高級官僚と結びつき、華商と共にタイ経済の基礎を築いた。タークシン王朝にはブンナーク家は関与しておらず、次に述べるソクラーのペルシア人が重用されていた。

トンブリ以外では、アユタヤからパトゥムタニー県バーンブアトーン郡へ移住した例がある。そこはモン族の住んでいた土地で、ムスリムはモン族と結婚した。モスクを建設したが、現在ではペルシア系ムスリムもモスクも存在しない。

(3) ソクラーのペルシア人

アユタヤの時代には、タイ南部のソクラーにもペルシア人が移住した。17世紀初め、ジャワ島中部のサレハ（*Saleh*）という場所を治めていたと言われる、ペルシア人のモゴールとその一族がタイ南部のソクラーに移住した。もとはサレハの国主で、ポルトガルの侵入により逃れて来たという。彼らはシーア派ではなく、スンナ派のシャフィイー学派に属していた。

モゴールの一族は、サティンプラ（現在のソクラー）に上陸し、フアカウデーという場所に住居を構え、軍事力を蓄えていった。当時のマラッカ海峡には海賊が出没したが、モゴールは政治と軍事に通じていたので、モゴールの住居はよく整備された要塞のようであった。モ

ゴールは外国との貿易にも力を入れた。やがてモゴールの存在はアユタヤの知るところとなり、ソントム王 (1611-28) はモゴールをソクラー国主に任命し、ナコンシータマラート国主の監督下に置いた。

モゴールは仏歴 2163 年 (1620/01) 頃に亡くなり、長男のスレイマンが後を継いだ。1629 年にアユタヤでプラサートトーンが王位を篡奪したが、スレイマンはこれを認めず、スルタン・スレイマン・シャーを名乗り、独立した。スレイマンはソクラーをマレー半島の重要な港に育て上げ、軍事的にも周囲の国を脅かした。アユタヤの 2 度にわたる攻撃に対して、スレイマンはマレー半島を横断する運河建設を試みたが、やがて断念し、代わりに山越えのルートを開拓した。

スレイマンにはムスタファー、フセイン、ハサンの 3 人の息子がいたが、スレイマンが仏歴 2211 年 (1668/69) に亡くなると、ムスタファーが跡を継いだ。アユタヤはこの年に再びソクラーを攻撃した。2 年間の包囲の後、ソクラーは敗れたが、篡奪王プラサートトーンの子孫であるナーライ王はムスタファーを処罰せず、現在のナコンシータマラート県のチャイヤーに移し、そこの国主に任命した。一方、フセインとハサンはアユタヤに役人として招聘されたが、フセインはチャイヤー副国主として兄のムスタファーを補佐した後、パツタルン国主となった。末弟のハサンは、アユタヤの海軍提督であるプラヤー・ラーチャバンサン(の)の称号を与えられたが、この称号はハサンに与えられたのが最初である。

その後、1688 年にアユタヤでペートルチャーが王位につくと、ナコンシータマラート国主

で、ムスリムのプラヤー・ラームデーチャーがアユタヤに反抗したが、アユタヤはハサンを海軍大将としてほぼ 3 年にわたりナコンシータマラートを包囲した。ハサンはプラヤー・ラームデーチャーとアユタヤ時代の旧友であったので、プラヤー・ラームデーチャーを脱出させたが、このために嫌疑をかけられ、ハサンはナコンシータマラートで処刑された。

ハサンの孫にあたるルアン・サックナーイウェーン(ムト)はバンコクの南側に位置するチャントブリーへ徴税に赴いたが、アユタヤ陥落後、のちのタークシン王となるプラヤー・ターク(スィン)に協力し、短期間で船団を整えてチャオプラヤー川を遡り、トンブリとアユタヤを回復した。ルアン・サックナーイウェーン(ムト)は、タークシン王から海軍提督であるプラ・ラーチャバンサン(ムト)に任じられ、さらに現在の首相にあたる最高武官のチャオプラヤー・スィーオンカラック(ムト)に任じられた。海軍提督の職はそのまま子孫に受け継がれたほか、商船提督であるプラヤー・ラーチャワンサンにも任命された。ラタナコーシン朝に入ってから、これらの地位は受け継がれていった。

現在、スルタン・スレイマン・シャーの子孫はアユタヤ県やバンコク市、スラータニー県、ナコンシータマラート県、ソクラー県、パツタルン県、トラン県などに分布する。バンコクでは多くが仏教徒に改宗したが、タイ南部ではイスラームを信仰している者が多い。スルタン・スレイマン・シャーの子孫の中で、宮廷の要職につき、仏教徒に改宗した例としてはナ・パツタルン(地方国主の称号)が知られている(Walliphodom 1996: 98-107, Chalayondecha

1996: 27-34)。

9. 南アジア系ムスリム

(1) 南アジアからのムスリム商人の来航

現在のインド、パキスタン、バングラデシュなど、南アジアからのムスリム商人の来航は、アユタヤ時代にまで遡る (Scupin 1998: 244)。アユタヤの外国人町に関する記録には、南アジア出身者がいたことが書かれている。すでに述べたように、アユタヤにはインド系のスーフィーのシーア派ムスリムによってモスクが建設された。しかし、南アジア出身のムスリムがどのくらいいて、どのくらいのモスクを建てたかについては詳しい記録がない。タイ北部では、18世紀後半ぐらいにベンガル系ムスリムが移住していたらしい。1840年代には、タミル人がバンコクにヒンズー教のシュリー・マリアンマン寺院を建設しているが、ムスリムがいたかどうかは記録がない (佐藤 1995: 13)。現在わかっている範囲では、ラーマ三世 (1824-1851) の時代に建設されたと伝えられる、シーア派のクディー・ディルファラーが最も古いモスクの一つである。一時はデリーに匹敵するほどの繁栄を誇った、インド北部の都市ラクナウから来たアダムアーリーというムスリムによって建設された (Khumraksa, 1999: 154)。現在のクディー・ディルファラーのイマーム、チャーン・アダムアーリー氏の祖先はラクナウから来たという。

南アジアからのムスリム移民が増加したのは、1855年にシャムとイギリスの間に締結されたポウリング条約により、英領インドの統治下にあった住民についても、タイにおける治外法権と自由貿易が認められたことによる。イギリス

の「保護民」として登録することは、タイ国内において大きな自由を手にするを意味していた。この前後から、貿易を通じて大きな富を手にするムスリム商人が現れる。例えば、すでにポウリング条約以前から拠点を構えていたと思われるベンガル出身のアーリーバーイ・ナーナー (A. E. Nana) の一族は、米と砂糖の貿易から身を起し、宮廷に接近することに成功して、中央タイの広大な土地の支配権を手にした。その名は、現在でもバンコク都心部の通りの名前として残っている。タイで最も古いインド系ムスリムの集団の一つが、インドのスラット出身の、シーア派のイスマイル派に属する、ダーウッド派のボーホラー派ムスリムで、1856年に A. T. E. Maskate 会社を設立して、インド、イギリスの製品とタイの地方特産品の貿易を行った。タミル人ムスリムの商人も、宝石や織物の貿易で成功し、バンコクにおける有力な宝石商となった。ダーウッド派のボーホラー派ムスリムとタミル人ムスリムの商人は、密接な通婚関係にあった (Scupin 1998: 244-245)。ここでは、現在のインド、パキスタン、バングラデシュから移住したムスリムを「南アジア系ムスリム」として扱っているが、これはこうした地域がイギリスの植民地である英領インドに帰属していた時代にタイへ移住し始めたことに関する。

ポウリング条約に代表される、タイとイギリスやフランスとの通商条約は、治外法権を認めた不平等条約であり、例えば英領インドなどの出身者を「保護民」と認定することにより、タイにおける実質的な影響力を強めようとした点でタイにとっては大きな脅威となり、治安の悪化をももたらした。1907年には、外国人と外国

領事館の「保護民」は総計 24,665 人、そのうち欧米人はわずか 1,600 人で、多くが近隣諸国からのアジア系移民で占められていた。また、フランス人とフランス保護民は 16,455 人、イギリス人とその保護民は 5,690 人であった (石井 1987: 136-7)。こうした治外法権撤廃のために、シャムは 1907 年のカンボジア、ラオスと接するシャム領の一部割譲により「アジア系保護民」の裁判権をフランスから、すでに述べたように、1909 年のマレー半島 4 州の割譲により同様の裁判権をイギリスから獲得した。同時に、これらの「アジア系保護民」には、タイ人と同等の権利、とくに土地所有権、居住権、国内旅行権が与えられた。その後、南アジア出身のムスリム商人は、タイに定住して行った者と、自国に帰った者とに分かれた。

(2) インド系ムスリム

タイ在住のインド人人口に関する統計としては、6 万 5000 人を超えるとする 1986 年のインド大使館資料、10 万人とするインド大使館発行の “Indo-Thai Relations (1993)” の資料などがあるが、それがインド国籍の人口を示すのか、インド系人口を示すのかが明示されていない (佐藤 1995: 18)。その内訳も、タイ国籍を取得した者、永住権を取得した者のほか、労働許可を得てタイに住んでいる者など様々である。ヒンドゥー教徒とシク教徒が多数を占め、これに次いで多いのがムスリムで、このほかナムダーリーが少数存在する⁷⁾。

タミルムスリム協会事務局のスイラジュディーン氏によると、インド系ムスリムの中でもっとも多いのはタミル人で、以下ラージャスターン、グジャラティー、他にマーラティーとパン

ジャビーが少数である。タイのタミル人のほとんどはバンコクに住み、ターク県メーソードとソクラー県ハジャイにも少数住んでいるということであるが、メーソードでの聞き取りでは確認できなかった。すでに述べたように、タミル人は南アジア系移民の中でも古い集団の一つである。バンコクではバーンラック区周辺に多く、その後スクムピット通り、チャイナタウン、サートン通り周辺に進出していった。

タミルムスリム協会の会員は発足時の 1975 年は約 50 名で、2000 年には約 500 名。タミル人とタイ人の間に生まれた子孫であるタミルタイ人の人口は 2000~3000 名で、タイ人と通婚していないタミル人は約 1000 名である。タイのタミルムスリムの職業は宝石関連の仕事のみで、この職業に従事しているタミルムスリムの数は 5000 人にのぼるということから、定住者以外にもタミルとタイを移動している商人が相当数いることになる。出身地はインドのタミルナドゥ州が 90%、スリランカ出身が 10% である。

すでに述べたシーア派のクディー・アルファラーの次に建設されたモスクが、ダーウッド派のボーホラー派ムスリムによって建設された、クローンサーン区にあるスラオトゥックカーウ (スラオセーフイー) である。イギリス保護下のラタナコーシン朝初期、1855 年~1861 年頃に建設されたらしい。多くは宝石商であったが、現在ではその多くがインドへ帰ってしまった (Khumraksa 1999: 155)。また、ラーマ 4 世の時代 (1851-68) にインドのスラットから来た商人たちは、ペルシア人の子孫であるブンナーク家のソムデトプラーヤ・ボロム・マハー・ピチャイヤート (タト・ブンナーク) の土地で、現

イスラーム地域としての中国とタイ (2)

在のトンブリ地区のプット橋のたもとにある、トゥックデーと呼ばれた地区に商店を開いた。タト・ブンナークは、官僚として最高位に登りつめた者の一人で、運河建設の指揮も執った。商人の中にはプラ克蘭の事務所に通訳として雇われた人がいたが、前述のアーリーバーイ・ナーナーもその一人であった (Khumraksa 1999: 152)。ナーナーの一族は同じくインド商人のウォンアーラヤの一族、そしてこの周辺に住んでいたラーマ三世の時代 (1824-51) にサイプリーから連れて来られたマレー系ムスリムたちと協力して、仏暦 2404 年 (1861/62 年) にクワティルモスク (スラオトゥックデー) を建設した。土地は、ブンナーク家から提供された (Jitmoud 2001: 98)。

タイ北部にも、同じ頃にインド系ムスリムが移住している。『チェンマイムスリムの歴史』によれば、約 200 年前にカルカッタから来たインド系ムスリムがチェンマイ県ノンペーンに住み、その後インドやバングラデシュ、ミャンマーからもムスリムが移住してムスリム人口が増えたため、19 世紀後半に上述のカルカッタ出身の「インド人」により、現在のチャークランモスクが建設された。1948 年には北タイ 7 県に対して外国人移動令が出され、イギリスの「保護下」にあった外国人はほとんどすべての土地を売り払わなければならなかった (Saetmalini 他 1996: 100-102)。このような状況の下で、「保護民」からタイ国民になる道を選んだ人々もいたと推測される。

(3) パキスタン系ムスリム

パキスタン系ムスリムは現在ほぼタイ全土に分布しており、地方の都市部に比較的集中して

いるが、必ずしも独自の集落を形成していない。東北タイのように、農村地域に分散している場合もある。しかしながら、パキスタン系ムスリムによって建設されたモスクも多く、モスク名に「パキスタン」を冠した場合が少なくない。

かつてパキスタンは英領インドの一部であったため、旧東パキスタン (現在のバングラデシュ) のムスリムも含めてパキスタン系ムスリムと呼ぶこともある。パキスタン系ムスリムのことを、マレー系ムスリムはタイ語でムスリム・パキー (*paki*) とか、一部ではバイ (*bai*) と呼ぶことがある。パキーとはパキスタンの略で (アラビア語を意識した場合には、p の音がないために「バギー」と発音される)、Pakistan という国名は独立の際に加わった五つの地域の頭文字から作られたものだが、タイ語の文脈ではサンスクリット語起源で「場所」を意味するスターン (*sthan*) を省略した呼び名である。タイのパキスタン系ムスリムにはパシュトゥーン人 (パキスタンからアフガニスタンにかけて分布)、パンジャブ (パキスタンからインドにまたがる地域、ムスリムが多数派)、バローチスターン、スィンドの出身者がいるが、パシュトゥーン人が多数を占め、パターン人 (パンジャビー語の呼び方で、ペルシア語ではアフガンと呼ぶ) と呼ばれることが多い。タイに移住してから姓を用いるようになった場合が多い。

パシュトゥーン人がタイへ移住するようになったのも、やはりボウリング条約締結以後のことであり、バンコクにあった当時のイギリス領事部に「保護民」として登録すれば、タイで自由に商売ができると考えられていた。すでに述べたように、彼らに対して治外法権が適用されたため、しばしば治安悪化の一因であると見な

されていた (佐藤 1995: 77)。バンコクでは中国人のような秘密結社を作っていたとも言われる (佐藤 1995: 6)。タイに定住してからは、畜産と精肉業に従事する者が多く、タイ人の多くが仏教徒で、なかでも大型動物の屠殺を好まないことから、タイのパシュトゥーン人の間にこうした仕事が広まったという。カンチャナブリー県のパシュトゥーン人ムスリムからの聞き取りでは、パキスタンにいた時期には農耕に従事し、肉類を扱うようになったのはタイに来てからという話であったが、実際にはタイのパシュトゥーン人には牧畜に従事する人が少なくない。これに対して、タイ南部では繊維製品の商人が多い。パシュトゥーン人の移住経路には、マレーシアのペナンまで船で来て、そこから汽車に乗ってバンコクへ行き、さらに地方へ移住したルートと、陸路でメーソード国境などから来たルートがあった。上述のカンチャナブリー県の場合は、陸路で移住した事例の一つで、1930年頃にペシャーワルのマネリという場所から移住した。知人からタイは土地が肥沃で人口が少ないと聞かされたのが、移住の動機だった。

パシュトゥーン人や、パンジャブ出身者のタイへの移住は、1920年代頃から増加し、1947年にインドとパキスタンが分離、独立してからは、故郷を失ってタイに定住する人々が増えた (佐藤 1995: 16)。チェンマイのパシュトゥーン人ムスリムも、インド系やバングラデシュ系ムスリムよりも後に移住してきたと言われており (Saetmalini ほか 1997: 96)、移住の時期はほぼ一致する。アメリカ軍の資料によれば、1962年にはタイのパシュトゥーン人は約3千人、1970年にはタイのパキスタン人全体が1万人以下、その8割がパシュトゥーン人、第二次世界大戦

後にタイに進駐した英印軍に食肉を提供するために移ってきた人々が多いという (佐藤 1995: 20-21)。タイにいるパキスタン人はムスリムだけではなく、スィンド、パンジャブなどから移住したシーク教徒も含まれている。

上述のように、タイ東北部にもパキスタン系ムスリムが散在しているが、仏歴 2470-2480 (1927/8-1937/8) にかけて移住したと言われる (Sosan ed. 2002: 1)。仏歴 2543 年 (西暦 2000 年) のデーニイサーンニュース 10 月号に掲載されているコンケン県バーンパイのムスリムの歴史によると、イブラヒム・パターンというパキスタン系ムスリムが、商売の機会を求めてバンコクに来て、そこで出会ったムスリムたちから、タイ東北部には農業や畜産のための広い土地があると聞き、仏歴 2475 年 (西暦 1932/33 年) にコンケン県へ移住した。一時母国へ帰国してから、仏歴 2477 年 (西暦 1934/35 年) にコンケン県に戻ると、新しい住居と最初の小さなモスクを建設したが、これが現在のダールンアーマン・モスクの始まりで、コンケン県最初のモスクであった。このモスクは、バンコクや中央タイから東北タイ各地へ商売に来たムスリムの礼拝と宿泊、情報交換の場所として利用、タイ東北部におけるムスリムのセンターとなった。

近年、タイ東北部のムスリムについての人口調査が行なわれ、東北タイ 19 県の 260 郡のほとんどにムスリムが分布していることが明らかになった (Sosan ed. 2002: 1)。東北タイのムスリムの場合、集まる機会があまりないことから、「ムスリム・イサーン (Muslim Isan, 東北タイムスリム)」としての結束を図ろうとしている動きがある。行政区分としての東北タイの

イスラーム地域としての中国とタイ (2)

ことをかつてはイサーンと呼んでいたが、その後は東北タイのラオス人をラオスのラオス人と区別してイサーン人と呼んでいる。このイサーンという名称を、タイ東北部に住むムスリムの人々が自分たちのアイデンティティに取り込もうとしていることは興味深い。

(4) バングラデシュ系ムスリム

ここで言うバングラデシュ系ムスリムとは、現在の国境線に基づいた分類で、従来はベンガル系という呼び方の方が一般的で、現在のバングラデシュとインドの西ベンガル州が含まれる。タイ人からはパキスタン系ムスリムと同一視される場合があるが、これは東西パキスタンの時代の名残であろう。タイ北部のムスリムの間では、ムスリム・バングラデーと呼ばれている。ミャンマー人からは「クラー」(西から来た人々)と呼ばれることあるが、東北タイのクラー族(ミャンマーから移住したタイヤイ族やカレン族の子孫だと言われる)も含めて、18世紀後半から19世紀にかけてミャンマー国境のメーソードなどを通してタイに来た商人を一般にこう呼んだものと思われる。タイ北部に最も早く移住したのは、ベンガル系ムスリムらしい。1880年頃に建設された前述のチェンマイのチャークラーンモスクは、ベンガル系ムスリムによって建設されたとも言われる。タイ北部からタイ中央部、また少数ながらタイ東北部にも広がって行った。

現在のターク県メーソード郡のムスリムの99%はベンガル系で、そのほとんどはタイ国籍を取得しており、移住してから何代か経過しているものと思われる。同地のイスラームスクサー校理事のチャーリー・スィープラサート氏に

よれば、同氏の祖先がメーソードに移住してきたのは1850年のことで、ベンガル湾のモーラミャインで繊維製品などを仕入れ、メーソードを拠点にミャンマーからタイ北部で商売をしていたという。おそらくは19世紀前半にはベンガル人がこの地域で活動を開始していたものと考えられる。『チェンマイムスリムの歴史』もまた、1850年頃に現在のバングラデシュ南東部の港町、チッタゴンから来たムスリム商人が、メーソードに常住していたことを伝えている。こうしたモーラミャインからメーソードに至る交易ルート他に、ヤンゴンからメーホンソーン県メーサリアン郡、チェンマイ県ホード郡を経てチェンマイに至るルートと、ベンガルや雲南からチェンラーイ県メーサーイ郡をへて、やはりチェンマイに至るルートがある。チェンラーイは、チェンマイやランパーン、ランブーン、タークなどへ移住する際の一時受け入れ場所であった。同じく『チェンマイムスリムの歴史』には、インド大反乱(いわゆる「セポイの反乱」)後、1860年頃のラーマ五世の時代に1000人以上のインド系ムスリムがチェンマイに移住したとあるが(Saetmalini 他1996: 97)、その中にはかなりのベンガル系ムスリムも含まれていたであろう。この他、1942~43年に日本軍がミャンマーに侵攻した際、ミャンマーに住むインドやパキスタンの約90万人のムスリムの一部がインドに戻ろうとしたが、最大10万人が死亡し、約30万の難民がタイ北部に避難したという(Saetmalini 他1996: 97-98)。1947年のインドとパキスタンの分離、独立後も、かなりの難民がタイ北部に流入している。こうした経緯についてはさらなる確認が必要であるが、全体として英領インドからミャンマーを経てタ

イに到る移住の流れがあったことがわかる。

タイ北部には、ベンガル系の他に、前回の調査報告で紹介した雲南系、パシュトゥーン系、19世紀にシャム政府によってタイ北部に移住させられたマレー系のそれぞれムスリムも分布している。この中で、少数ながらもマレー系がチャオ・ナイ (*chao nai*, 指導的エリート) と呼ばれ、高い宗教的知識を持っていると言われる (Scupin1998: 247)。このことは、現在でも雲南系から見た場合に、マレー系が高い自尊心を持っていると感じられるという聞き取り調査の内容と関係があるように思われる。

10. ミャンマー系ムスリム

ここでいうミャンマー系ムスリムは、タイに滞在しているミャンマー国籍 (もしくはミャンマーに数世代にもわたって住んでいたが、国籍を与えられなかった人々) のムスリムのことである。筆者 (木村) は独自の集団として扱っているが、筆者 (松本) は広い意味での南アジア系ムスリムに含めて考えるべきだという立場であり、南アジア系ムスリムのミャンマーを経由しての移住プロセスのあり方の一つとしては注目に値すると考えている。筆者 (木村) の調査によれば、チェンマイ県、ランブーン県、カンチャナブリー県、プラチュワップキーリカン県、チュンポーン県、ラノーン県などに分布し、定住者はタイ北部やミャンマー国境の県に多い。出稼ぎ等、タイに合法、非合法に入国しているミャンマー人は数十万人にのぼると言われ、筆者 (木村) の聞き取りによると、ミャンマー系ムスリムには屋台などで生計を立てている人々が多い。ただし、屋台は人目につきやすいので、

実際には日雇労働者が多いのではないかと推測される。第一世代でもタイ語を話せる場合が多く、タイで生まれた子供の場合はミャンマー語が話せない場合が多い。

カンチャナブリー県サイヨーク郡ボンテー村には、以前バンコクのムスリムが経営していたスズの鉱山があり、ここではアンダマン海に面したダウエー (タヴォイ) から来たミャンマー系ムスリムも働いていた。同村にはモスクが建設されている。これらの人々は、1995年頃に鉱山が閉鎖された後もタイに滞在、現在はタイ政府から土地を与えられ、約100名のムスリムが約30名の仏教徒とともに住んでいる。同村に初めてムスリムが来たのは約40年前、ネーウィンが支配していた時期で、中国人やムスリムを外国へ追放した。ダウエーのムスリムには、元々バングラデシュから移住してきた場合が多く、ミャンマーでは容貌がミャンマー人に似ていないというだけで、ミャンマー国籍を与えられなかった場合もあり、現在でもミャンマーへ帰ることができない人々がいる。

同じくカンチャナブリー県サンクラブリー郡には、ミャンマー側も含めて150家族のムスリムがいる。ここにもモスクがあり、約40~50年前にモーラマインから移住したという。モーラマインは、バングラデシュからの移住者が多い。ミャンマーで麻薬取引に関与し、ミャンマーにいられなくなった人々もいる。サンクラブリーでは国境貿易が盛んなため、仕事を求めて来る人が少なくない。アメリカやインド、マレーシア、インドネシアへ移住した人もいた。カンチャナブリー県のミャンマー国境沿いにある難民キャンプにもムスリムがいるが、北にあるターク県もほぼ同様の状況である。

以上のカンチャナブリー県の場合は、バングラデシュ系ムスリムがほぼ一代をミャンマーで過ごしてからタイに入って来る場合だと考えられる。

次に、ミャンマーからタイへ一時的に仕事で来ている場合として、アユタヤの東側に位置するサラブリー県ムアン郡のモスクで寝泊まりをしている人の例があり、モーラミヤイン出身で、祖先はやはりバングラデシュ人である。以前は屠殺場で働いていたが、聞き取りの時点では失業中であった。ムスリムは牛を扱い、タイ人がブタを扱うという。初めてタイへ来たのは12年前で、査証は取っている。ターク県メーソード郡の国境を通ってきた。タイ文字は読めないが、タイ語をかなり話すことができる。今回は友人も一緒に誘って来ていた。この他、バンコク市内のモスクに礼拝に来ていた人の場合、バンコクで繊維製品の輸出業に携わっている。衣類などをバンコクで仕入れ、やはりメーソード国境まで運んで、ミャンマー側の業者に引き渡している。バングラデシュと接するアラカン州出身で、妻がヤンゴンにいたので住居はヤンゴンにある。この人の場合は労働許可証を持っていて合法的に仕事をしているが、タイのミャンマー人の多くは不法入国者だという。バンコクで労働許可証を持って仕事をしているミャンマー人は約80名に過ぎないという。

筆者(木村)の見解では、タイのイスラーム研究者はこのミャンマー系ムスリムに一切言及していないが、タイ国籍を持たない不法入国者が多いためであると考えられる。

11. マレーシア北部のタイ系ムスリム

マレーシアのケダ州北部、プルリス州とタイ側のトゥーン県やソクラー県の国境付近にはタイ語文法にマレー語彙を交ぜて話す人々がいる。タイ語は南タイ方言で、例えば「ご飯を食べる」は *kin nashi*、すなわちタイ語の *kin* (食べる) + マレー語の *nashi* (ご飯) となる。これらのタイ語を母語とするムスリムのことを「サムサム」と呼ぶ。19世紀のイギリス植民地時代の官吏が「サムサム (*Sam sam*)」と呼んだ人々で、1822年に Crawfurd がタイ語とマレー語の両方を話す人々が「サムサム」であると述べており、1839年に Newbold が「サムサム」はシャムの宗教と言葉を受容したマレー民族で、1821年のナコンシータマラートのケダ州侵入以後、タイからケダ州内に移住したと述べている(黒田1989: 44)。1911年のイギリス植民地時代の人口調査にも「サムサム」の項目がある(黒田1989: 48)。このサムサムにはムスリムと仏教徒がいるとされるが、この違いについて1957年にサムサムを調査した Archaimbault は仏教徒を指導者とし、仏暦を使用する仏教徒のサムサムを *Samsam Siam* と呼び、イマームを指導者とし、イスラーム暦を使用するムスリムであるサムサムを *Samsam Malayu* と呼んでいる(黒田1989: 43)。黒田は「サムサム」の由来について、マレー語で「共に」を意味する *sama-sama* が語源であるという説、またタイ語南部方言で「混ざる」という意味の *samsam* の訛りであるという説、福建語で「交える」「混ざる」という意味の *tcham-tcham* の訛りであるという説を挙げている。

マレーシアのケダー州クバン・パス (Kuban pasu) のコディアン (Kodian) にあるモスクのイマーム代理から聞き取りを行ったが、南タイ語方言にマレー語を交ぜて話しており、サムサムのな特徴があった。しかしながら本人は自分がサムサムであるとは思っていない。南タイ語方言にマレー語を交ぜて話しているという意味でのサムサムは知らないが、ムスリム・サムサムと呼ばれる人々がいて、礼拝や断食を行わず、モスクに来るように誘っても、恐れてモスクに来ようとはしない。ケダー州以外の地域も含めて、サムサムはイスラームを実践しないムスリムのことを指し、出身地や言語とは関係ないという。

タイのサトゥーン県ムアン郡クワン村での聞き取りによれば、ここではケ・ザムザム (*Ke Zamzam*) と呼ばれており、この人たちは「天にも届かず地にも落ちることができず、しかしながらどの宗教にも属さないわけにはいかないので、しかたなくイスラームを受け入れた人たち」のことであるという。「サムサム」にはマレー語の「混ぜる」という意味のほか、「天にも届かず地にも落ちることができない宙ぶらりんの状態」(イスラーム的な考え方なのか土着的な考え方なのかは未確認) という意味があるという。そして、元からイスラーム教徒であるが、実践を行わないムスリムのことを「ムスリム・サムサム (*Muslim Samsam*)」と呼び、イスラームに入信した異教徒を「サムサム・ムスリム (*Samsam Muslim*)」と呼ぶらしいが、さらに確認が必要である。

マレーシアのケダー州アロースターにあるザヒールモスクでの聞き取りによれば、ケダー州でタイ語を使用するムスリムがいるのはナポレ

(Napore)、チェロク・マカン (Cherok Makkan)、チャンロン (Changlon)、クバン・パス (Kuban Pasu)、ナカ (Naka) などである。前述のケダー州クバン・パスのコディアンのイマーム代理の話では、クバン・パスのコディアンのムスリムはマレー系、ムスリム・サムサム、インド系、中国系、タイ系 (英国官吏の定義ではサムサムに入るが、ムスリムとしての実践をしていると見なされている人々を指す) に分かれる。仏教徒の人口が多く、ムスリムは少数派である。コディアンのタイ系ムスリムはタイのパタニーやサトゥーンの出身で、コディアンの人と結婚して移住してきた。現在も親戚や知人が訪ねてくる。日常生活ではマレー語を使用し、タイから親戚や知人が来たときにはタイ語を使用する。チェロク・マカン村での聞き取りでは、チェロク・マカンからチャンロン周辺にタイ語を話すムスリムが多く、チェロク・マカン村はタイ系ムスリムだけである。同村の住民も、タイのソクラー県ハジャイ市やジャナ郡などに親戚がいる。タイ系の仏教徒の集落はグバンチャノ、パダン・セーラーなどである。

タイ系ムスリムもマレー系ムスリムと同様に、ルミー文字による普通教育とジャウィー文字によるタディカー (平日の夕方や休日を利用して児童のためのイスラーム教育施設, TDK すなわちタマン: 場所, テディカン: 教える, ガナガナ: 子供, の略) でのイスラーム教育の両方を受けている。一方、タイ系仏教徒の多い地域では、マレーシア政府の援助によりタイ語教育が行われ、タイ語の読み書きができる。ムスリムの村では、タイ語を話すことはできても読み書きはできないという相違がある。このため、子供の世代ではタイ語が理解できず、チェロ

ク・マカン村では30才以下の人々はタイ語が話せないという。このように、タイ系ムスリムにはマレー化する傾向が見られ、これに対して仏教徒はタイ人としての特徴を保持しているようである。タイ系ムスリムのアイデンティティは重層的であり、まずはマレー系ムスリムに帰属しており、インド系、中国系とは区別されるが、マレー系とムスリムとの差異を表わす場合にはタイ系ムスリム (*Islam Thai*, これに対してマレー系は *Islam Malay* と呼ばれる) として区別される。タイ系ムスリムの人々は、現在でも「シャム」という単語を日常的に使用している。例えば、仏教徒の集落にいるタイ人を *Sayam* と呼んだり、タイ国を *Prathet Sayam* (タイ国) と呼んだりしている。

かつてこの地域は、マレー半島東海岸にはパタニー王国があり、北側にあるタイのサトゥーン県はマレー半島西海岸のケダー王国とバンコク王朝の境界地帯にあり、したがって東海岸よりはイスラームの影響が弱く、他方で仏教国であるバンコク王朝の影響もそれほど浸透していなかった。このため、マレー文化とタイ文化が混淆し、イスラームと仏教が混合して、サムサムのような独特の集団が形成されたと言われる(黒田1989, 西井2000: 39)。この独特の文化について、サトゥーン県よりもさらに北にあるクラビー県における聞き取りでは、「マレーシア方面から移住して来たムスリムは、たしかにムスリムではあったが、イスラーム文化を受容したのは後からである」という興味深い説明を聞くことができた。マレー半島西海岸では、かつてムスリムが仏教寺院へ寄付を行っていたこと、ムスリムと仏教徒との間で「友情の契り (*kru kan*)」が行なわれてこれに仏僧が立ち会

っていたこと、身寄りのないムスリムを寺院で火葬したことなどがわかったが、これらはこの数十年來のイスラームの教育と宣伝により消滅してしまったという。この問題はイスラーム復興の流れとも関係があり、次回の報告で扱うことにする。

12. アメリカのタイ系ムスリム

ロサンゼルスのアズザ地区には「タイ・モスク」がある。アメリカにはタイ寺院が数多くある一方で、タイの名を冠して「タイ・モスク」と呼ばれるのはここだけである。イマームからの聞き取りによれば、このアルファータハ・モスクが海外で最初のタイ・モスクであるという。アメリカにいるタイ系ムスリムの場合、宗教目的でない留学生か、仕事で来ている場合が多く、このイマーム以外には宗教的指導者もいない。このイマームはタイ華僑出身で、アメリカへ来る数年前に仏教からイスラームに改宗し、1968年にアメリカへ留学に来た。筆者(木村)の調査によれば、タイ系ムスリムは、カリフォルニア州が特に多く、約40~45年前が流入のピークであった。当時は出入国管理がそれほど厳しくはなく、アメリカでお金を貯めてタイへ戻る場合が多かったが、一部はアメリカに定住した。

約20年後にアメリカ・タイムスリム学生クラブ(タイ語名 *Chomrom nakrien thai muslim nai amerika*・英語名 *Thai muslim association*) が結成された。当時は任命制により指導者が選出され、モスクや宗教学校もなかった。1992年にモスクと学校建設の事業が発足したが、当時の会員数は約100名、子供を入れても

約 200 名程度であった。このイマームはもともとはアメリカ・タイムスリム学生クラブと関係がなかったが、選挙により会長に任命された。当時カリフォルニア州モンロビアにあったイマームの土地を、仮モスクとして使用した。イスラーム教育も始めたが、協会のメンバーは若い人がほとんどで、数少ないイスラームの知識を持っている人が教えた。NPO としてカリフォルニア州政府に登録し、タイムスリム協会 (Thai Muslim Association) となった。

イマームはタイへ一時帰国して募金活動を行ったが、タイのムスリムはアメリカの状況を十分に理解せず、イマームの家族が仏教徒だということもあって、順調には進まなかった。アメリカではワシントンにいたタイ人の有力者、ニット・ピブーンソクラームや、当時領事を努めていたスポット・ティラガサンの協力を得て、エジプトなどと連絡を取った。まだ信用度は低かったものの、このイマームの存在は知られるようになって行った。努力の甲斐があって、ようやくタイ政府の宗教局から 100 万バーツの寄付を受けることができた。別に 6 万ドルもの寄付を集めることもできた。タイの上院議員、スライマーン・ウォンパーニットからの協力で、現在のモスクの用地購入が決まり、1998 年 12 月にアルファーティハ・モスクが完成した。現在、礼拝などに来るタイ系ムスリムは約 300 名、多くはモスク周辺の住民である。バンコク近郊出身者とタイ南部出身者が、半々である。法学派 (マズハブ) は特に限定しておらず、イマームが学んだ知識に基づいて礼拝などを行っている。

タイ系ムスリムに続いて、約 200~300 名のカンボジア系ムスリム (チャム系かどうかは不

明) が移住し、1992~1993 年頃にタイ系ムスリムよりも早くモスクを建設した。

13. 婚姻による改宗

タイではムスリムと仏教徒の結婚に伴う改宗が日常的に行なわれており、このこともムスリムの人口統計を不明確にする要因の一つである。男性ムスリムはムスリムまたは「啓典の民」(主にユダヤ教徒、キリスト教徒)の女性と、女性は男性のムスリムとだけ婚姻することができる。このため、これ以外の人々と結婚するためには、相手側が改宗する必要がある。タイへ移住した場合、往々にして男性だけの場合が多く、タイ人女性と結婚するケースが少なくなかった。雲南人の場合のように、初期の移民はタイ人女性と結婚したが、移民が大規模化するにつれ、出身地が同じもの同士での結婚も増える傾向がある。他方で、タミル系ムスリムのように、親による許嫁が現在でも行なわれている場合もある。

ノンジョーク区、ミンブリー区などバンコク周辺のマレー系ムスリムの集中する地域では、都市部の拡大とともに仏教徒との混在が進んだほか、工業化により企業での就業機会が増えたため、これらの地域に住むムスリムは仏教徒と接触する機会が増えている。こうした状況の下で、バンコク市ノンジョーク区では、仏教徒との婚姻は約 90% にのぼり、ムスリムの女性と仏教徒の男性の婚姻が多い。多くの場合、仏教徒がムスリムに改宗している。また、仏教徒の子供がムスリム家庭で養育される場合もある。

タイ南部では、やはりムスリムと仏教徒の混在しているトラン県パリアン郡の場合、仏教徒との婚姻が約 30% を占めている。クラビー県

イスラーム地域としての中国とタイ (2)

のピーピー島では、漁民の半数強がムスリムで、かつては海に存在するものを崇拜していたが、婚姻によりムスリムとなった。歴史的には、すでに述べた、パタニー王妃と結婚した中国人のリム(林)トキアウの事例があり、リムトキアウが建設に関与したとされるパタニーのクルセモスク周辺には中国系ムスリムが多く住んでいたといわれている。南タイ3県には、現在でも中国系ムスリムの集落がいくつかあるといわれているが、未確認である。

こうした婚姻による改宗以外にも、ラオスに近いノンカーイ県ファウライ郡セーム村カムトーユーン集落のように、ダアワ・タブリーク運動(イスラームへの入信や信仰の強化を図る運動、今回の報告で紹介する)の働きかけにより、5家族55名が改宗して、運動の中心であるタイ南部のヤラー県でイスラームを学んだという事例がある(東北タイムスリム教育開発基金発行のニュースレター、Chotmai khaw so. pho. o. 2000年7月号)。また、タイ南部西海岸のサムサムのように、表面的にはムスリムであるかどうかかわからないような事例もある。こうした改宗の問題についても、今回の報告でタイにおける国民形成とムスリムの関係を論ずる中で言及することにした。

14. おわりに

今回の報告では、タイにおけるムスリムの移民とコミュニティ形成の歴史について紹介したが、「タイムスリム」、「ケーキ」といったカテゴリーに関しても、今回のタイにおける国民形成とムスリムの関係の中で取り上げて行くことにする。今回取り上げた、タイのムスリム諸集

団の歴史についても、近代以後の歴史に言及した場合とそうでない場合があるが、これらについても次回に補足することにした。

注

- 1) 石井米雄は、アユタヤがイスラーム化しなかった理由として、王権の正当性が「仏教の擁護者」たることにあり、仏教信仰の放棄は、王の正当性を放棄するに等しい行為であることを熟知していたからであり、東南アジア島嶼部の権力は後背地が少なく、権力基盤の弱い小国家が当時勢力を誇っていたイスラームを受容することで権力の正当化を図ったと見なしている(石井 2001: 194)。
- 2) アユタヤ県のプラップ集落の歴史によると、アユタヤ朝ナーラーイ王の時代の2223年(1680/81)ごろ、王軍と南タイの軍がソクラーを攻撃し、ペルシア人とジャワ系マラユ人(*malayu jawa*)、パタニー系マラユ人(*malayu pattani*)がアユタヤへ移住させられた。これらアユタヤ時代からいるマレー人は「旧マレー人(*malayu kao*)」、ラタナコーシン朝以降に移住してきたマレー人は「新マレー人(*malayu mai*)」と呼ばれた。
- 3) 具体的な連行先について、ジャラン・マルリムはラーマー三世の時代にはパタニー王族をバンコク市バーンケーク、タノントックからバーンウー周辺へ、パタニー都市住民をバンコク市プラトウナームからターカイ、ペブリー県ペブリー、チャチェンサオ県、ナコンナーヨック県、パトゥムタニー県へ、一般の捕虜はバンコク市トゥンクル、バーンコーレーム、マハーナーク、プラカノン、クローンタン、ミンブリー、ノンジョーク、サムットプラカーン県プラブラデー、ナコンナーヨック県、チャチェンサオ県、ペブリー県、アユタヤ県、ノンタブリー県ターイット、スラータニー県タートーン村、ナコンシータマラート県としている。ラーマ三世の時代にはサイ

ブリー（現在のマレーシアのケダ州）とパタニーなどからナコンシータマラート周辺とバンコク市周辺へ連行したとしている（Malulim, J 他 1996: 14）。イムロン・マルリムは、このラーマ三世の時代の連行について、バンコクとその周辺ではナコンナーヨック県 22 番運河、バンコク市タノントック、サーイゴンディン、ミンブリー、ノンジョーク、ラードクラバン、バンコク市からチャチェンサオ県に通じるセンセーブ運河、パトゥムタニー県ランシット運河、アユタヤ県アユタヤ、ノンタブリー県ターイット、ノンタブリー、ペブリー県ペブリー（Malulim, I 1995: 10）としている。いずれにせよ、これら移住先の情報の出所をジャラン・マルリムらとイムロン・マルリムは、はっきり示していない。この他、サオワニー・チットムワットはサイブリー、パタニーなどのムスリムをナコンシータマラートやバンコクとその周辺に住ませたとしている（Jitmoud 1988: 112）。

- 4) サートーン区ジャワモスク、バーンコーレーム区バーヤンモスク、バーンコーレーム区ダールルアービディン、バーンラック区バーンウーモスク、パトゥムワン区インドネシアモスクの 5 ヶ所がある。
- 5) 1953 年に当時のピブーンソクラーム首相により用地収用が発令され、バーンチャーロー区ブランノック通りの現在の場所に移住し新しいモスクを建設した。しかしながらモスク周辺には土地が少なかったため多くの住民は別の場所へ移住していった。
- 6) 以前はクディーボンの信徒であったが、仏歴 2497 年 (1954 年) にクディーボンの信徒同士で宗教儀礼の一部について対立があり、ペン・メーナーコムを指導者とする信徒の一部がここを離れ新しいモスクを建設し、宗教学校としても使用した。政府が土地収用を行なった 2486 年 (1943 年) に、現在のイサラパーブ通りのワットホンラタナラーム横丁に移転した (Khumraksa, S 1999: 154)。(筆者注:

この部分には年代記述に問題がある。)

- 7) インドのシク教から分離した一派で、クラとも呼ばれる。バラク・シン (Balak Singh, 1797-1862) によって設立された。

参考文献

(日本語)

家島彦一

- 2001 「イスラーム・ネットワークの展開」『東南アジア史 3 東南アジア近世の成立』東京：岩波書店。

石井米雄

- 1992 「『港市国家』としてのアユタヤ」『東南アジア世界の歴史的位相』東京：東京大学出版会。
- 1999 『タイ近世史研究序説』東京：岩波出版。
- 2001 「後期アユタヤ」『岩波講座東南アジア史 3 東南アジア近世の成立』東京：岩波書店。

石井米雄・吉川利治

- 1987 『日・タイ交流六百年史』東京：講談社。

大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之編集

- 2002 『岩波イスラーム辞典』東京：岩波書店。

黒田景子

- 1989 「『SamSam』と呼ばれた人々タイ、マレーシア国境地帯の Thai-speaking Muslim」『マレーシア社会論集 2』東京：東京外語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

佐藤宏

- 1995 『タイのインド人社会』東京：アジア経済研究所。

ティーラワット・ナ・ポームペット

- 1990 「アユタヤと諸外国との関係」『アユタヤ歴史研究センター』アユタヤ：アユタヤ歴史研究センター。

富田竹二郎

1990 『タイ日辞典』天理：養徳社。

西井涼子

2001 『死をめぐる実践宗教—南タイのムスリム・仏教徒関係へのパースペクティヴ—』京都：世界思想社。

ブラップルン・コンチャナ

1990 「港湾都市としてのアユタヤ」『アユタヤ歴史研究センター』アユタヤ：アユタヤ歴史研究センター。

松本光太郎・木村正人

2001 「イスラーム地域としての中国とタイ (1) —タイ北部雲南系ムスリム調査報告—」『コミュニケーション科学』第14号, 東京：東京経済大学コミュニケーション学会。

2004 「中国と東南アジア大陸部のイスラームに関する画像資料のデジタル化」『コミュニケーション科学』第20号, 東京：東京経済大学コミュニケーション学会。

(英語)

Andaya, Leonard Y.

1999 “Ayutthaya and the Persian and Indian Muslim Connection”. *From Japan to Arabia: Ayutthaya's Maritime Relations with Asia*. Bangkok: The Foundation for the Promotion of Social Sciences and Humanities TextBooks Project.

Chutintaranond, Sunait

1999 “Mergui and Tenasserim as Leading Port Cities in the Context of Autonomous History”. *From Japan to Arabia: Ayutthaya's Maritime Relations with Asia*. Bangkok: The Foundation for the Promotion of Social Sciences and Humanities TextBooks Project.

Cushman Richard D. (tr.) and Wyatt David K. (eds.)

2000 *The Royal Chronicles of Ayutthaya*. Bangkok: The Siam Society.

Kuroda, Keiko

1995 “The Samsams and the Siamese: Historical Memories of the Sam Sam on the Thai-Malaysian Border”. *Cross-border Perspectives from Thailand and Malaysia*. Kyoto: The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.

Omar Farouk Bujunid

1999 “The Muslims in Thailand: A Review”. *Southeast Asian Studies Vol. 37 No. 2*. Kyoto: Kyoto University

Reid, Anthony

1988 *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680, Volume One: The Lands below the Winds*. Chiang mai: Silkworm Books.

1993 *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680, Volume Two: Expansion and Crisis*. Chiang mai: Silkworm books.

1999 *Charting the Shape of Early Modern Southeast Asia*. Chiangmai: Silkworm Books.

Scupin, Raymond

1998 “Muslim Accommodation in Thai Society”. *Journal of Islamic Studies Vol. 9 No. 2*. Huddersfield: Oxford University Press.

Skinner Syril (tr.) and Corfield Justin (eds.)

1993 “Rama III and the Siamese Expedition, The Dispatches of Luang Udomsombat”. *Monashi Papers on Southeast Asia-No. 30*. Victoria: Monash University.

- Wyatt, David K.
 1982 *Thailand, a Short History*. New Haven and London: Yale University Press.
 1994 *Studies in Thai History*. Chiangmai: Silkworm Books.
- (タイ語)
 Binci Ariffin, A. Laoman and Bualuang Ahmad Somboon
 2000 *Patani darussalam*. Yala: The Center of Southern Thai Islamic Center.
- Chalayondecha, Prayunsak
 1996 *Muslim nai prathet thai*. Bangkok: Khrongkan hosamud klang islam sai sakun sultan sulaiman.
- Chunpakdi, Srayut
 2001 “Muslim masjid tonson kap banphaburut sam samai”. *Muslim masjid tonson kap banphachon sam yuk samai*. Bangkok: Khanakammakan cat ngan sewana “Muslim Masjid tonson kap banphachon sam yuk samai”.
- Hattha, Khrongchai
 1998 *Pattani-Kankha le kanmuang kanphokkhong nai adit*. Pattani: The Prince of Songkhla University.
- Jitmoud, Sawvane
 1988 *Chaw thai muslim*. Bangkok: Kong thun snga ruciraamphon.
 2001 “Klum chatphan muslim nai thonburi”. *Muslim masjid tonson kap banphachon sam yuk samai*. Bangkok: Khanakammakan cat ngan sewana “Muslim masjid tonson kap banphachon sam yuk samai”.
- Khumraksa, Sirisak
 1999 “Khon fang thon”. *Thonburi*. Bangkok: Samnakphim sanrakhdi.
- Kongchana, Plubplung
 1995a “Chumchon persia nai ayutthaya”. *Caophraya bwan ratcha nayok kap prawattisat sayam*. Bangkok: Institute of Islamic Studies with the Cooperation of the Cultural Center of the Islamic Republic of Iran.
 1995b “Phatthanakan thang prawattisat chumchon chaw persia nai ayutthaya”. *Caophraya bwan ratcha nayok kap prawattisat sayam*. Bangkok: Institute of Islamic Studies with the Cooperation of the Cultural Center of the Islamic Republic of Iran.
 1999 “Phatthanakan thang prawattisat chumchon cam ayutthaya”. *Journal of History 1999*. Bangkok: Srinakharin Wirot University.
 2002 “Phatthanakan thang prawattisat chumchon chaw persia nai ayutthaya”. *Sasana islam*. Bangkok: Cultural Center Embassy of Islamic Republic of Iran Bangkok Thailand.
- Kulsirisawat, Direk
 1962 *Khwan samphan khong muslim thang prawattisat le wannakadi thai*. Bangkok: Matichon.
 1974 *Samphao kasat sulaiman*. Bangkok: Matichon.
- Malulim, Imron
 1995 *Wikhro khwan katyaeng rawang rattaban thai kap muslim nai prathet thai: Kroni sukusa klum muslim nai khaet cangwat chaidaeen phak tai*. Bangkok: Islamic Academy.
- Malulim Jaran, Amonthat Kitima and Trichot Phonphimon
 1996 *Thai kap lok muslim*. Bangkok: Sthaban esia sukusa, Chularongkhon University.

Manacit, Adun

- 2002 “Prawatisat khwam samphan rawang thai-iran”. *Sasana islam*. Bangkok : Cultural Center Embassy of Islamic Republic of Iran Bangkok Thailand.

Muhammad Bukhari, Lubis

- 1995 (A Speech) *Caophraya bwan ratcha nayok kap prawattisat sayam*. Bangkok : Institute of Islamic Studies with the Cooperation of the Cultural Center of the Islamic Republic of Iran .

Muhammad Ismail, Masankhosaki

- 2002 “Itthiphon dan sasana le watthanatham khong iran”. *Sasana islam*. Bangkok : Cultural Center Embassy of Islamic Republic of Iran Bangkok Thailand.

Phengkaew, Niphatphon

- 2000 “Muk leng andaman klang krase khlun le lom reng”. *Phuket*. Bangkok : Samnakphim sanrakhdi.

Phongsphaibun, Suthiwong (ed.)

- 1986 *Saranukrom watthanatham pak tai*. Songkhla : Srinakharin Wirot University.

Sale, Rattiya

- 2001 *Kan patisamphan rawang sasnik thi prakot nai changwat pattani yala le narathiwat*. Bangkok : The Thailand Research Fund.

Sumali, Chuthamas Kannikar

- 1998 *Jawa-Chwa nai bangkok*. Bangkok : The Thailand Research Fund.

Tangtrongchit, Siri

- 1990 *Caopraya buwanrachanayok chek ahmad*. Bangkok : Munnithi caopraya buwanrachanayok (Chek ahmad).

Thwamprathom, Kasem

- 1996 “Muslim chuasai cam”. *Muslim nai prathet thai*. Bangkok : Khrongkan hosamud klang islam sai sakun sultan sulaiman.

Walliphodom, Srisak

- 1996 “Sai skhun sultan slaiman”. *Muslim nai prathet thai*. Bangkok : Khrongkan hosamud klang islam sai sakun sultan sulaiman.

Wat Srichandon, Adam Biem, Unas Chaloemsuk, Kittiya Hassan, Suchat Saetmalini, Sombat Suwannathip, and Arhon Dalam

- 1996 “Prawat khwam pen ma khong muslim nai chiangmai”. *7th Asean Qur'an reading Contest*. Bangkok : Natcha Publishing Co., Ltd.

Wongthet, Sucit

- 1982 *Suk Makkasan Muang bangkok*. Bangkok : Matichon.

(パンフレット・小冊子など)

Disttakorn 他

- 1998 *Muslim in Thainand* (The Council of Islamic Affairs of Bangkok, The Foundation of Islamic Center of Thailand によるパンフレット)

Sosan, Cirasak (ed.)

- 2002 *Muslim isan pritat*. Udonthani : Munnithi phua kan sukusa le phatana muslim isan.

Prawat than cao phrakun takia le masjid takia yokin ratchamiscinca sayam (タキアヨーキンラーチャメッセンジャーサーヤームモスクの歴史に関する冊子)

Ngan poet pai le chaloem chaloeng akan masjid nulunyaman (ヌルンヤマーンモスク落成記念文書), 1980 年発行